

# ひじり

第43号  
2021・6・13 発行  
金光教教学研究

## 「開かれ」を求めて

第三部部长 白石 淳平



ふと、資料やディスプレイから視線を窓ガラスに移す。すると、羽虫の補食に失敗したヤモリと目が合った途

端、間抜けにも階下へと墜落していくその姿に、なんだか凝り固まっていた視界が解かれる。「研究所あるある」とも言える夜の「コマだ」。

文字通り「山の上」にある本所の周辺では、ご期待に漏れず、野鳥や野良猫に加え、狸やイタチ、時には野兎も見かけたりと、動物との遭遇に事欠かない。では、教祖時代はどんな環境だったのだろうか。そんな妄想から資料に視点を戻すと、「運上山」との記述に目がとまった。

同(文政十二)年

御林、東西権現平両ひら二ヶ年に

切り払いに相成り候。  
その後、村受けになり、運上山に相成り候。  
(「金光大神年譜帳」六五丁表)

引用は、「御林」つまり領主林だった山が、村の管理下に置かれ、所定の納税を条件に活用を認められる「運上山」となった経緯を伝えている。「権現平」(現在の横池あたり)というから、教祖の修行場として伝えられる権現山を指すだろうか。

この二年後、十七歳となった教祖(文治郎)は元服し若者組の一員となり、伊勢参宮も果たしていたことが、続く文政十三年の記事に確認できる。「年譜帳」を記す晩年の教祖には、「一人前」の分別の芽生えと共に、大谷村の地勢にも関心を寄せていた十五歳当時が、思い起されたのかもしれない。



ところで、各地に数多く見られる「権現山」のうち、新美南吉による童話『ごんぎつね』の舞台として知られるのが、愛知県阿久比町の「権現山」である。そして、その『ごんぎつね』の「ごん」は、お寺の鐘の音だとする説がある(青木美智男『ごんぎつね』と環境歴史学)。池底から狐が鐘を打つ音が聞こえるという同県知多半島の民話が、同作の下敷きになっているというのだ。

新美の出生地である同県半田市は古代以来、窯業や塩業で栄えたが、燃料確保のため繰り返された伐採により半島の山は痩せ、松ばかりとなった。さらに元々真水に乏しい土地なため灌漑用の溜池が多数あったが、松の山は水害を防ぐ砂留山としては貧弱すぎた。そこで尾張藩は、小動物の働きによって山の植生を再び雑木化するべく、一定期間の山への立入禁止及び領民の生活保障に打って出たのである。そうして、池のほとりの林に棲み着いたのが、「ごんぎつね」というわけである。

なお、童話『ごんぎつね』の初出は昭和七年の『赤い鳥』誌上とされるが、単著の童話集として採録・刊行されるのは、作者の死後、同十八年のことであった。刊行当時の時代状況を思えば、人間と動物の視点の交錯を通じ、加害／被害といった主客の認識的転倒を誘う同作が帝国主義的暴力支配に対する疑義になり得ると見られても不思議ではない。

こうした人間と動物との交錯、混交をめぐっては、「覚帳」の明治十三、十四年の二度示される、「鳥畜類」との記述が思い浮かぶ。前者は人間の無礼の及ぶ領域、後者は金光大神による救済の対象範囲と、ベクトルが異なるが、「すべての眼で生き物たちは開かれた世界を生きている」と始まるリルケ『ドゥイノの悲歌』(第八歌)を想起させるような、信心の世界の果てしなさ

を浮かばせる人間以外の視点として共通している。

◇

さて、先の引用に見える「運上山」には、その後年「みな金神の地所」(明治六年「御神伝」)の前景として展開された地租改正の動向との関連性も示唆される。そうした近代化における区分や管理、さらにはその認識的基礎としての自他の境界への意識(アイデンティティ)は、ここまで述べた事柄とも重なり合っており、ともすれば、閉じがちなままで「教祖」や「神」そして「教団」を思い描く私たちの視界の閉塞性をきわやかに問題視させてくれるのではないだろうか。

教祖、教義、教団史という研究分野や領域も含め、何を歴史として、そして信心として眼差していくのか。信心の足場を社会から厳しく問われている今だからこそ、先人より受け継がれてきた教学研究のこれからを、着実に、かつまた大胆に、創造的に、求めていきたい。

因みに、大正から昭和を生きた新美南吉とその師北原白秋は共に、金光教との縁が伝えられる人物でもある。彼らの作品に浮かぶ「開かれ」の感性が、そもそも信心の世界に触れる何かに発していたとしたら。そんな想像も膨らむが、それはまた、別の話。

(愛媛・南宇和教会)

## ◆令和三年度の計画◆

本年度は研究生一名を加え、所長以下総勢一五名でのスタートとなりました。昨年同様、新型コロナウイルスの感染拡大に伴う対応として、当初予定していた行事の延期や変更なども生じておりますが、改めて、そうした今だからこそ、これまでの取り組みの再検討を行いつつ、教学研究としての新たな展開へ向けて、より一層、着実な取り組みを進めてまいりたいと思っております。

今後の実施に向けて、おかげを蒙ることができますよう、願いを立ててまいりたいと存じます。

なお、現時点での予定は以下の通りとなりますが、状況によって変更となる場合もあります。

### 紀要論文講読セミナー

これまでの研究成果を全教の皆様と共に学びなおす機会として、紀要論文講読セミナーを開催します。初めて論文に触れられる方も意識した取り組みです。

開講以来、教祖、教義研究の成果を中心に取り上げてきましたが、本年度からは新たに、担当者の関心を基本としつつ、教団史研究の分野にも対象を拡げていくこととしました。

本年は、次の四本の論考を取り上げます。参加希望の場合は事前にご連絡下さい。

なお、開講日・内容などが変更となった場合には、金光新聞や金光教本部フェイスブック、教学研究所ホームページなどを通じて随時ご案内いたします。

【場所】金光北ウイング光風館研修室

【日時】各日一三・〇〇～一四・三〇

〈実施済み〉

【第一回】五月一〇日(月) 担当・橋本雄一

橋本真雄「出社の成立とその展開(上)

―教団組織の問題をめぐって―(第四号)

※新型コロナウイルスの感染拡大に伴う対応として、公開を見合わせ、本所大会議室にて職員のみで開催しました。

〈予定〉

【第二回】七月一〇日(土) 担当・須寄真治

藤尾節昭「布教と教義化の問題

―「信条」をめぐって―(第一一号)

【第三回】九月一〇日(金) 担当・森川育子

藤井記念雄「戦後教団の動向と諸問題」

(第一三三号)

【第四回】十一月一〇日(水) 担当・堀江道広

加藤実「金光大神広前への参拝の諸相」

(第四五号)

### 第六〇回教学研究会

第六〇回の節目を迎える本年の教学研究会は、「教祖研究の現在―金光大神事蹟に関する研究資料」を手がかりに―をテーマに、個別の研究発表、所長による基調講演、全体会を予定しています。

当初六月開催予定でしたが、現下の状況に鑑み延期としました。現時点としては、一月一日の開所記念日を基準日とし、来場対面参加とオンライン参加を併用した開催に向けて調整を行っております。

### 第一五回教学に関する交流会

信奉者との討議や意見交換を通じた、相互の問題関心の醸成を願うための取り組みです。

本年度は、教祖の事蹟に関する知見等の紹介と懇談を内容とし、開催する予定です。

なお、開催日は未定です。

### 第二二回教学講演会

布教功労者報徳祭当日(十二月一二日)の午前に、紀要六一号の研究成果を題材にした教学講演会を開催する予定です。

この他、継続して研究に連動した資料の収集・管理を進めるとともに、各種研究講座、研究発表等の充実を図っております。

さらに本年は、「金光大神直筆帳面2」の紀要掲載を予定しており、現在、原典ゼミにて解説文の検討作業を進めております。

なお、例年、広く現代の問題関心との連関を深めながら、研究内容の充実を図るべく、他宗教教団・宗派との研究交流(教団付置研究所懇話会)や、一般諸学問との交流を行っています。本年度も、状況に鑑みつつ進めてまいります。これら取り組みを通じて、問題意識の先鋭化、方法の研鑽、研究領域の開拓に培ってまいりたいと存じます。

### 令和三年度研究題目

#### 〈第一部 教祖研究〉

- ・ 金神社活動における「明治四年―
- ― 金神信仰組織再編へ向けた

態勢の問題の位相―

所頁 岩崎繁之

- ・ 広前へ訪れた者達と金光大神との関わり

― 「金乃神様金子御さしむけ覚帳」を

手がかりに―

所頁 堀江道広

#### 〈第二部 教義研究〉

- ・ 人間社会と不条理の問題

― 特に原爆をめぐる体験の諸相に注目して―

所頁 高橋昌之

#### 〈第三部 教団史研究〉

・ 神と人との関わり、その描出の実際性と解釈の問題

― 「覚書」「覚帳」のテキスト環境へ向けて―

所頁 白石淳平

- ・ 明治末大正期の信奉者における

対社会意識の生起と諸活動

所頁 山田光徳

- ・ 岡山市周辺地域における布教の諸相

― 金光大神在世時から明治二〇年代を

対象に―

所頁 須崎真治

- ・ 昭和初期における一青年の信心希求とその背景

― 松鷹長一のノート類を手がかりに―

所頁 森川育子



消火栓・消火ホース点検(6月)

★提

研究員

向井道江

★言

## お宝山分け夢物語



「教学って、結局何なん？こんな私で理解できるのかな。」

これは、教学研究会に初めて出席する時に感じていた、私の正直な気持ちです。

それがいざ参加してみると：現代の悩みにもマッチする、教祖が説いたご理解の広さに出会い、感動。様々な時代状況で、どうかこのお道を現わしていこうとされる先人方の必死の姿に出会い、感動。研究に関わる方々のひたすらに問い続ける姿勢や、お道への並々ならぬ愛情に触れ、感動。教学は、信心の感動を私に教えてくれる宝箱へと変わっていききました。

けれども、そうなる手前のことも、忘れてはいけません。前知識の乏しさと脆弱な読解力から、たった一つの紀要論文を読み終えるのにさえ何日も苦戦したことや、教学研究会に、電子辞書・教典・用語辞典等、考えつく限りのものをドツサリと持ち込んで「内容は理解出来るだ

ろうか」と悶々としていた時間のことです。

つまり、教学は初めて触れる人にとっては、ハードルがとても高いのです。

すでにお宝が埋もれている山はたくさんあるし、発掘隊もどんどん掘り進んでいつてくれるのに、掘り出したものがどのようなお宝なのか、分かりやすく説明してくれる営業マンが少ない状態のようだと感じます。

もちろん、とても見やすい研究所のホームページや、教学に関する交流会や教学講演会など、今までも多くの取り組みをなされていますし、忙しい研生活の中でここまで出来ておられるのは本当にすごいとしか言いようがありません。それでもなお、私のように「教学」と聞くと、思わず辞書と教典を準備して肩に力が入ってしまうう人の方が、多いのではないのでしょうか。

今回の記事を書くにあたって過去の提言を拝読させていただくと、やはり同じように感じられている提言がいくつか伺えましたので、ここからは私が「実際にあったらいいな」と思う夢の話をしてみたいと思います。

最近、夕飯を食べ終わると夫がテレビでYouTubeをよく観ています。服の紹介動画や、仕事に役に立つ思考法、本の内容紹介などの動画です。私も隣で一緒に観るのですが、イラストや写真とともにテンポよく流れる解説、これがとても分かりやすいのです。これと同じもの

が、紀要論文でも出来たら素敵だと思いませんか？紀要論文の内容を、10分程度でイラスト等を使って要約。題名は『10分de分かる紀要論文』といったところでしょうか。

それならば、辞書も教典も必要はなく、お茶の間にあるテレビからも気軽に観ることが出来ます。内容がもっと気になる方には、講演会や交流会へ促すことも出来るかもしれません。

ただ、この内容を研究所員だけにお願いのものも違うような気がしています。なぜなら、研究資料に向かい、内容を深めていく思考と、だれにでも、より簡単に分かるように翻訳していくことは、基本的に性質が違います。だとしたら、所員の方々は今まで通り研究を進めていただき、周りを巻き込んでいくのはどうでしょうか。

パツと思いつくのは、まずは有志です。すでに教学に興味があり、さらに動画作成やプレゼン技術がある人達。教学研究会で興味をもった論文を、まとめ動画にしてもらうのも面白いかもしれません。得意そうな研究員の先生方の顔が、数名浮かんでくるような気がしませんか？

それから学院生。紀要から一つ論文を選んでもらい、実際に動画を作るところまでやってみてもらうのも面白いかもしれません。分からないところは学院職員や研究所員に直接聞くことが出来ますし、教学に自発的に触れる大きなチ

ヤンスになるかもしれませんが。

細かいところまで考え出すと難しくなりますが、せっかく発掘してください。お道の宝を、もつと多くの人達とも分かち合いたいと、提言としてこのような夢を描かせていただきました。願うなかで今後どのようなことが起こってくるのか、これからが、さらに楽しみです。

(徳島・佐古教会)

エイ  
セイ

### 信心のいま

(その一)

## 金神様、ご健在(?)

評議員 森山恵美子



コロナ禍にあつて、昨年来、多くの行事や祭典を延期、縮小することとなった。新年宅祭も例外ではない。年末に数軒のお

宅から「どうぞさせてもらいましょう?」とお尋ねがあり、各家の事情に合わせて対応させていただいたが、布教当初からのご信者さん・Yさ

んは、「こんなときこそ神様に来ていただきかんと!」と、前のめり気味のお願ひがあり、感染対策の上、仕えさせて頂いた。

というのも、以前から懸案になっていた前庭の改修に、「ことしいよいよ取りかかりたい」との願ひもあつてのことだった。

「先生、三月にお祓いをお願いします。」「了解しました。神様にお願ひさせていただきます。」「

現在の当主Yさん(六〇代)は、実はほとんど教会に参つたことがない。教会参拝は奥さんの役目で、年に一度の新年宅祭と、「家や土地をいじるときには必ず金光さんへお願ひしてからすること」というY家の信心初めのおじいさんの言いつけだけはかたくなに守っている。

日を決めるときも、「その日はちよつと」「あ、その日もちよつと」と数回やり取りがあり、「その日は午前ならいい」と決定したのち、奥さんが、申し訳なさそうに「お父さんが、暦を見て、日が悪いと言つて…」と事情を話してくれた。金神様、ご健在でしたか!。

昨年、「金光大神年譜帳」が刊行され、教祖様ご自身や当時の人々の心情や生活ぶりが、また少し体温をもつて感じられるようになった。第百十一回の評議員会では、令和二年の白石所員の研究報告の中で、その「年譜帳」が取り上げられていて、明治六年の改暦後、「金神お廃し」と官憲の統制が厳しくなつたなか、「金神様は人

を叱りだけの神でござるか」と鴨方遷卒役人が教祖様の元へ尋ねてくる事柄が紹介されていた。のちに生きる私たちは、「この年、ご神名が定まる」等、先人が整理してくださつた年表で一つひとつのご事蹟の意味を、「歴史」として押さえていただいているが、思うに、当時の人々の心情や生活はもつとずっと混沌としていたのではないだろうか、などと思つたりする。

金神の属性を問う遷卒に、教祖様は、「御願ひ申し上げれば楽」と応じられた。不肖の私も敢えてYさんの日柄見を直すことなく、天地の親神様とこの庭をととのえてくださったご先祖様とに御礼申して、改修工事の無事を四世代集合したY家のご家族と一緒に祈らせていただいた。

(島根・今市教会)



第111回評議員会(3月)

エ  
ッ  
セ  
イ

信心のいま

(その二)

## コロナ禍と祭典

事務長 滝口祥雄



小学六年生の時、本部大祭に参拝した。前年に完成したばかりの会堂は眩いばかりに輝き、その荘厳さに心を打たれた。祭場では、一万人以上の参拝者が唱和する御祈念の声にただただ圧倒された。そして、記念写真を撮り、参拝者で埋め尽くされた境内を泳ぐように帰路についた。それだけのことが、妙に嬉しかった。

人びとの心と身体とが集まって、一定の空間と時間を共有し、一つの祭典が形成されていく。私が子どもの頃に感じた祭典に対する肌感覚は、案外、人を信心へと誘っていく面があるだろう。ところが、この度のコロナ禍によって、人びとが集うことが難しくなり、祭典の様相が変わっていくにつれて、このような認識にも揺らぎと

修正が差し迫っていることに気づき、正直戸惑いを覚えた。

わが家の大学生の子ども達を見ていると、授業はもとより、各種のミーティングや手続きに至るまでオンライン化が進んでいて、バーチャル空間での滞在時間は長くなる一方である。このような事例が社会の中で数多く起こっていると思われる。

そうした現実を照らして、いま私たちの身体は、避けがたくも新しいバランス感覚を必要としているのではないか。そして、それは祭典についても言えることなのではないか、と感じる。

現在、祭典の場に集うという最も基本的な事柄が制限あるいは否定されるという事態下において、より普及が進んだ感のある祭典や教話のオンライン配信は、病気などの諸事情で参れない人も祭典を頂くことができる等、利点もある。見方を変えれば、それは祭場の特定空間を地球規模にまで拡大する、壮大な試みの一つとさえ言い得よう。

しかし一方で、インターネットの利用には、パソコンやスマホをはじめとする機器環境を整備し、操作に習熟する必要があるなど、必ずしも皆が同等の条件下で、その恩恵を享受できるというものでもない。

教祖理解に「別に、遠い所を入費を使うて大谷まで参詣するにおよばぬ。天地金乃神はどこ

のいづくにもござるのじゃから、どこから頼んでもおかげはこうむれます。余計な入費を使うて参らんでも、うちから頼みなされ」(理1近藤藤守69)というものがあるが、現状は、この理解の具現化を氏子に求めているように思える。インターネットは、あたかも現実のように見せかける仮想世界を、避けがたく拡大しするが、それを批判的に対象化しつつ、包摂していくような新たな世界観・祭典観の構築が、いま求められているのかもしれない。

とはいえ、これまで慣れ親しんだ日常が変わり、世界が変わりつつあるいま、あたかもその流れに一人取り残されたかのような困惑と焦慮を覚えるのは、必ずしも私一人ではないような気もするのだが……。

(宮崎・日向教会)



教学講演会動画配信の準備(昨年12月)

## 令和二年度研究報告

### 検討会に参加して

信心へのまなざし

— 問い返される

「当たり前」をめぐる —

第三部所員 須崎真治



信心において何が大事とされてきたのか、またそれを大事としてきた我々はどうあったきたのか。今回の研究

報告検討会を通じて、当たり前のように大事にされる事柄が、逆に自身のありようを照り返してくることを考えさせられた。これは、今年度の本所の計画が総論に掲げる、教学研究の対象について述べた箇所とも通じるものがある。それは、教学研究が「私たちの信心の価値を支えている、教祖の信心の実際や、本教信心の歴史、社会的な様相はもちろんのこと、それを認識し判断する人間の側の価値観や自己の存在のありようをもその対象としてきた」とする内容

である。

この度、総論に掲げられた、我々のありようを問い返すという問題が、報告の中で具体化されているのを肌で感じるようになった。では、どういう内容にそれを感じたのか、ここで二例紹介したい。

まず一つは、高橋昌之報告(「めぐり」の位相とその意味—本教における人間観、救済観への問い—)である。これは、明治末大正期の教内紙誌を対象に、「めぐり」が用いられる文脈に注目している。「めぐり」は、それが運命論的・否定的価値を帯び、それ故にか、公然には語り難い面をもっている。しかし、その言葉をもって布教現場では信心が語られてきたのである。報告は、この言葉自体が人間存在を呪縛する一方で、その呪縛性と共に可能となっていた救済観を動態的に把握しようという試みとなっている。

報告を読んで、まず印象的に感じたのは、私の中にも蠢く、ある種の「怖さ」であった。それは、この言葉が問題だからといって、適切に扱うことを求めたり、言い換える言葉を用意し対処することで済ましてよいのかということである。現にその言葉が使われ、またその言葉で信心が喚起されてきたのも事実である。とすれば、その事実をただ問題だからという理由で無視してしまつてよいのかということが自問される。報告でも、「めぐり」の言説が信心を起動さ

せるといった効力をもったことが指摘されている。しかもその人をまるごと否定するかのような問題を印象づけながら…。

私には、この問題は何も「めぐり」というこの一語をどう扱うかという問題に尽きるものではないと思われる。この報告がそうだったように、我々が目を向けるべきは、それを発する者と聞き受ける者との相互の関わりでの信心のより深い確かめが必要なのではないかということである。報告は、現代では「めぐり」の言説がかえって人を信心から遠ざけることになりかねないとも指摘していた。そうとすれば、より深い信心への確かめは、自分自身のあり方に振り向けていくことがいっそう大事だと思わされるのである。

このように、私が考えさせられたのは、「当たり前」ということを私自身に注目させる教学研究の大事な作用についてである。

このことにも関わって次に紹介したいのは、改暦後の明治の社会の中でなお人々に生きられていた金神という神表象について取りあげた白石淳平報告(「金神再考への視座—「金光大神暦注略年譜」「金光大神年譜帳」の様相を手がかりに—)である。

これは、暦注廃止によって金神の实在性が揺るがされる事態が、かえって金光大神において、金神を意識させることになった様子を取りあげ

たものである。その中では、「暦注略年譜」「手控え綴」「年譜帳」の各帳面を扱いながら、次のことが指摘されていた。それは、改暦についての記述量の増加には、金光大神における改暦という出来事への関心のありようが見られるというものである。興味深かったのは、最も記述量が多くなっている「年譜帳」にのみ「金神無し」との記載があるという指摘だった。

これは、金光大神における金神への意識のありようが「無し」ということで逆説的にクロージアップされる問題を述べたものである。金光大神に繰り返し確かめを迫る状況それ自体が、金神の存在の有無を問う問題として意識化されている。金神が「無くなった」ということが反対に金神という存在への関心をいっそう浮き立たせていることが言われているのだろう。こうした指摘は、まず実在するものがあって、認識はそれによって生じる、というような通常我々が思う実在物への認識の順序や仕方では捉えられない、ものやことの表出を認識のありようから浮かばせているように思える。殊にこのことは、金光大神においてのみならず、時代状況と個々の人間の意識作用との関わりを豊かに捉えていく可能性を、我々の信心に向けて開かせてくれるのではないかと思わされるのである。

以上述べてきたことから考えさせられたのは、

教学研究の役割である。自明とされてきたものや当然とされてきたことを、それとして済ますのではなく、いっそう深く取りあげ問題化していくというその役割は、人々を救いに導く信心の力を現代によびおこすことに繋がっていくだろう。

時代社会、資料環境も変わっていくと言われ今、もはや何が自明か、何が当然かまでも揺らいでいる。それ故に改めて自明とされてきたもの、当然とされてきたことへの問いがリアルなものとなっていていよう。その意味においても、冒頭に述べた本所としての願いを胸に刻み、ここからの取り組みをいっそう充実させていきたい。

(香川・高松教会)



立教百六十年に刊行された資料『金光大神事蹟に関する研究資料』が縮刷版になって発売されました。

**価 格**

九九〇円 (税込み)

**大 き さ**

A5版×98頁

**問 い 合 わ せ**

金光教徒社

**電 話**

(〇八六五)

四二一―二〇三七

**ニューフェイス**

**研究生**

三好 儀生 (愛媛・上宇和教会)

研究生として入所することになるまで、私は紀要論文を読んだことがありませんでした。今は金光教の歴史を学ぶことが楽しくてしかたありません。

それは、論文を読んで知らなかったことに出会うということがまずありますが、読んだ感触を話し合う中で、内容を必死に理解しようとする私とは違う読み方との出会いがあるからです。

書かれた当時の時代背景や資料状況なども手がかりにしつつ、論文筆者の問題意識を読み取ろうとされる先生方の姿を見て、「読む」ということについて考えさせられています。

読んで「知る」ことにとどまらない「読む」という取り組みの奥深さを含め、学ぶことが多いからこそ楽しみも多く、研究生として、素直な気持ちで、新しいことや新しい自分とたくさん出会い、成長していきたいと思えます。





## 研究所と私

願  
い

書記 金子信栄



私の研究所での御用は、今年で三年目を迎える。もともとは、研究生として入

所させて頂いたのが

はじまりである。約半年の研究生期間を終えた後は、事務室に、昨年の四月からは資料室の御用に携わっている。この二年間で、研究所の多岐に亘る御用をさせて頂いているのは、とても貴重で、ありがたいことだと感じている。現在に至るまでには、「なんでこのようなことが…」と思うようなこともあったが、御神縁のおかげを賜り、無事に三年目を迎えることとなった。振り返ってみれば、現在までの過程は、神様の大きな働きの中で起きたことであり、神様が何かを私に願われていて、こうされたのだろうか、と思わされる。

そもそも研究生に志願したのは、学院で過ごしていくなかで、なぜ金光教の信心をするのか

という問いが生まれ、そこから、この道の信心や神様について深く知りたいと思うようになったからである。研究生期間は資料や文献を読み、解題レポートを書くということが中心であった。解題を通して初めて読む資料に、新鮮な驚きや喜びというものを感じ、また、今まで知っていた物事の新たな側面を見せられて、自分はその物事について、知ったつもりになっていたんだということに気づかされたりと、資料や文献のもつ意味の大切さ、重要性をひしひしと思わされた。

研究生として資料に向かっていたときは、どれだけ自分がここに書いてある内容を読み込んで理解できるか、ここから何をどのように考えることができるのかが重要だと思っていた。今でもそれは大事なことだと思っている。しかし同時に、そうして「読む」ことができるのは、資料を資料として成り立たせる資料室の働きがあつてのことであるなど、気付かされる。

資料室員としての御用を通じて、より一層、資料や文献の大切さ、重要性を感じるようになった。原資料の複写をし、紙折り、製本して、体裁を調べて、「読める」ようになった資料の内容が、研究者の手によって、いきいきと表現されていると、「少しはお役に立てたのかな」と、喜ばしい気持ちになる。

まだまだ失敗も多く、未熟者な私ではあるが、

資料を資料として成り立たせることができるように精進し、教学研究の尊い営みの一助となるような私にならせて頂きたい。

(福岡・夜須教会)



第59回教学研究会(昨年11月、来場対面参加とオンライン参加を併用して開催)

# 彙報

(令和二年六月一日  
〜令和三年五月三十一日)

## ▲ 人事関係 ▼

### 一、職員

○臨時御用奉仕金子信栄、八月一日付で書記に任命、資料室員に指名。○部長高橋昌之、一月三十一日で任期満了。翌一月一日付で再任、第二部長に指名。○助手堀江道広、一月一日付で所員に任命。○部長児山真生、部長辞任により一二月三十一日付で第三部長の指名を解く。

○所員児山真生、一月一日付で図書館へ異動。○幹事白石淳平、一二月三十一日付で幹事を辞任。

○所員白石淳平、一月一日付で部長に任命。第三部長に指名。○所員山田光徳、一月一日付で幹事に任命。

### 二、研究生

令和三年度

○教徒三好儀生、五月一日付で研究生を委嘱。

### 三、嘱託

○嘱託竹部弘、六月三〇日付で委嘱を解く。

### 四、研究員

○研究員高阪有人、同八坂恒徳、一月一九日で委嘱期間満了、翌一月二〇日付で再度委嘱。

### 五、評議員

○評議員岩崎道與、六月三〇日付で辞任(三期

一〇年)。○教師浅野弓、七月二日付で評議員に任命。

※五月三十一日現在

所長、部長三名、幹事、所員三名、助手二名、事務長、主事二名、書記一名、研究生一名(計一五名)、嘱託六名、研究員八名、評議員五名。

## ☆ おめでた ☆



### 出産

○所員山田光徳・光世夫妻に、三月二日、三男晃成くん誕生。



研究生入所式(前列左から所長、三好儀生研究生)

# SAKAMICHI

今年も通信『聖ヶ丘』を無事に発行させて頂くことができました。原稿を執筆して下さいました方々には御礼を申し上げます。

昨年から続く新型コロナウイルスにより、研究所においても御用内容に変化がありました。例えば、毎年恒例の教学研究会は十一月にオンライン形式を導入し開催しました(九頁写真)。

十二月の教学講演会は動画形式にしました(六頁写真)。学会出張もリモートでの参加になったりしています。あつて当たり前の生活では無いことを痛感しながら、色々な可能性を探り、できる限りの事をさせて頂きたいと思っています。

また、昨年六月には放水訓練をさせて頂きました。そのことから備え付けの消火栓とホースを繋ぐスタンドパイプと劣化した消火ホースを更新させて頂いています。今まで実際に使用する場面はありませんが、これからも、防災の意識を持ちつつ確認、準備を施していきたいと思っています。

㊦

発行・印刷 金光教学研究 所

岡山県浅口市金光町大谷一四四一の三

電話 (〇八六五) 四二一三一一七

FAX (〇八六五) 四二一三一一九

<http://www.konkokyo.or.jp/kyogaku/index.html>